



U LaLa Report

うららレポート

No. 1

U La La Report について

埼玉大学の学生が授業の一環として「地域の魅力づくり」の課題発見とその解決策をフィールドワークを通じて模索し、成果を発表していきます。

History 過去の災害から今のまちへ

浦和大火というものをご存知ですか？ 1888年(明治21年)3月14日、足立郡浦和町常盤町の辺りで出火し、激しい西の風に吹かれながら煙と砂塵を巻き上げて瞬間に燃え広がりました。300戸250棟が全焼、2戸2棟が半焼し、全市街の約2/3を焼き尽くし、約5時間かけて鎮火されたと言われて



ときわだんご
☎ 048-822-4166
📍 さいたま市浦和高砂1丁目12-1 浦和駅西口コロン1F

いる大火災です。この火災が起きた際、多くの消防軍が鎮火にむかったものの、井戸水の不足、龍吐水(箱に入れた水を手押しポンプで噴出させる消火用具)の整備不良など様々な問題により即座に鎮火することができず、ただ火が燃え広がっていくのを黙って見ているしかなかった、という記述が残っています。過去の出来事とは言え、このような大きな災害が起きる前にきちんとした対策を取っておけばここまでにはならなかったかもしれない、と考えさせられます。

一方で、地域のつながりが防災に重要な役目を果たしたという事例もありました。浦和大火の際、学校生徒の協力が大きな助けになったことや、ときわだんごというお団子屋さんのご主人が、被災した人々にお団子を振る舞い、炊き出しも行ったというエピソード

が残っているのです。ときわだんごの店舗は当時浦和の中山道にありましたが、現在浦和駅の駅前に移動し、今でもおいしいお団子と共に浦和を見守ってくれています。

今回は、それほど大きな火災があった浦和が、過去の災害を受けて現在どのような防災活動に取り組んでいるのか、また浦和に住む人々が為すべき防災対策は何なのか、行政の視点と市民の視点それぞれにおいて取材をし、考察しました。そして、行



「浦和市史 第四巻 近代史料編1」昭和50年2月20日発行 浦和市発行

政と市民それぞれについてだけではなく、どういったところでお互い発信しあっているのか、どのようなところで協力し合っているのかも合わせて取材しました。

Town 町を守る防災の取り組み

かつて大火災に見舞われた浦和地区ですが、現在はその陰を見せない豊かな暮らしを臨める街となっています。そんな私たちの暮らしの安全を支えているのが、浦和区にあるさいたま市消防局です。消防局では現在、消火活動はもちろんのこと、「防火」に焦点を当てた様々な取り組みを行っています。その1つに、チラシや広報誌の配布があります。これには、消防の活動や火災の主要原因、その予防策などの様々な情報が掲載されており、JR浦和駅等で配られています。さいたま市消防局パンフレットはさいたま市のホームページで見ることができ、ぜひ一度目を通してみてはいかがでしょうか。また、火災予防強化期間というのをご存知でしょうか。さいたま市では、春と秋の2回、それぞれ1ヵ月の強化期間を定めています。季節の変わり目は火災が多く、消防局はこの期間に特に広報活動に力を入れているそうです。

防火の取り組みには、私たちにもできることがたくさんあります。例えば火災警報器の設置は火災の被害を小さくすることに繋がります。また、家族や地域の人と連携して放火されない環境を作ることも防火の1つです。まちの安全を守っていくためには、消防局の取り組みに続くように、私たち全員が協力して取り組んでいくことが大切だと思いました。



平成28年11月9日にJR浦和駅で行われた、「全国一斉周期火災予防運動に伴う駅頭広報」の消防音楽隊の演奏

Future より安全で災害に強い都市をめざして

私たちが災害に備えてできることには、非常用グッズの用意、災害時における家族間の安否確認方法の決定など、様々なことがあります。それでは、行政はどんな対策を行っているのでしょうか。浦和区のあるさいたま市の都市局都市計画部都市総務課政策係の大久さんに市の防災に対する取り組みについて伺いました。

現在、さいたま市では国の指針に基づき作成された、安心で安全なまちづくりを目指す「さいたま市防災都市づくり計画」が行われています。災害リスクの調査を経て、市の抱える課題を市民の方々と共有するため、区民まつりなどのイベントや出前講座ではシミュレーションを用いた火災延焼の模擬実験などが行われています。そして、情報共有の進んだ地域では、整備に向けた検討が徐々に始まっています。また、被災後の復興への備えも防災都市づくりの一環と捉え、生活者と行



区民まつりなどで配布された「さいたま市防災都市づくり計画」のパンフレット。さいたま市ホームページからダウンロードできます。

政の双方の視点から考える復興イメージトレーニングも行われています。

大久さんは、自分の住む地域にはどんな災害の危険性があるのか知ることが災害に強いまちづくりの第一歩になるとおっしゃっていました。取材を通して、行政の取り組みには市民の協力が欠かせず、小さな取り組みの積み重ねが大切であると感じました。そして、出前講座や市のホームページを通して得た情報を次の段階の防災対策に生かすことで災害に強い都市は実現できるのではないかと思います。

編集後記

1本の消火器をきっかけに

浦和の防災について取り上げたきっかけは、アトレ浦和の見学の際に見かけた、設置に工夫がされた消火器でした。取材から浦和では様々な防災に対する対策やイベントが行われ、浦和の皆さんの安全を守り、共に安全な環境を作る取り組みがされていることがわかりました。私たちの班のメンバーが何気なく防災について気が付いたこと、また浦和で防災への取り組みがたくさんあることから、防災は私たちのすぐそばにあるものなのだと実感しました。この記事がみなさんにとって防災をより意識したり、興味を持ったりするきっかけになれば幸いです。



教養学部教養学科3年 山本 拓郎
工学部建設工学科2年 青池 優
教養学部教養学科3年 太田 菜津子
教養学部教養学科3年 江頭 令奈
工学部応用化学科2年 加藤 優香
担当教授 石坂 督規

浦和大火の歴史を紐解くことで災害時における共助の大切さを、また、さいたま市の防災意識向上に向けた啓発や計画策定などから自助、公助の意義を学ぶことができました。いつ起こるか分からない災害であるからこそ、日頃の備えや地道な活動が重要になってきます。学生たちも、日常の備え、情報の共有、そして地域住民との連携の大切さを実感したのではないかと思います。

今回、取材にご協力いただいたみなさまには改めて御礼申し上げます。これからも、埼玉大学学生たちによる「渾身」の「うららレポート」にご期待ください。

埼玉大学教授 石坂 督規

お詫び：前号記事にて過去の取材店として取り上げました「雑貨店カアサ」は、2017年3月末で閉店されておりました。